

第4回学術集会報告

秋山美紀

第4回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会 実行委員長
慶應義塾大学環境情報学部

2012年9月7日(金)、8日(土)の二日間にわたり、慶應義塾大学看護医療学部湘南藤沢校舎にて、日本ヘルスコミュニケーション学会第4回学術集会が開催され、約90名が参加しました。

今大会の基調テーマは、「健康と医療をめぐるコミュニケーション—実践知を學問にすゝめるために」でした。

特別講演として、北村 聖氏(東京大学医学教育国際協力センター教授、日本医学雑誌編集者組織委員会[JAMJE]委員長)に、「学術情報のコミュニケーションとプロフェッショナルリズム」と題した講演を、さらに、吉村 健清氏(産業医科大学名誉教授、日本疫学会元理事長、福岡女子大学教授)に「疫学からコミュニケーションへ—ヘルスコミュニケーションの役割と課題」と題した講演をいただきました。

北村氏は、近年の学術論文の剽窃や倫理違反等の問題事例を挙げながら、学術情報のプロフェッショナルリズムの重要性を論じました。この分野でのプロフェッショナル教育の方法がまだ確立されていない中、東京大学では少人数グループワークである課題発見問題解決型学習(PBL)において不

正論文を取り上げて討論するなどの試みをおこなっているとの報告がありました。



北村聖氏の特別講演の様子

また吉村健清氏は、人類の感染症との闘いの歴史の中での疫学の役割に触れながら、疫学研究で把握した実態を、どのように市民等に伝えることができているのかと問題提起しました。疾病予防の観点から、疫学の成果を現実社会で活用するには、人々の行動に結びつけることが不可欠で、ヘルスコミュニケーションは、そのステップを乗り越えるうえで期待されていると語りました(吉村氏の論文は、本誌 pp. 6-11 に掲載)。



吉村健氏の特別講演の様子

テーマ別のシンポジウム形式のセッションは、3つの企画で行われ、計8名のパネリストが登壇しました。

シンポジウム1「医療とコミュニケーション学の対話」(コーディネータ:宮原哲・杉本なおみ)では、医療者と患者の「まなざしの違い」はどのようにして生じ、またその溝はどのようにして埋められるのかについて議論が行われました。青山学院大学教授の田崎勝也氏が、科学的根拠を絶対視しがちな医師こそ、自らの認識論が価値依存的事であることに気付いて、患者側の多様な認識論的信念に理解を示すことが重要であると述べました(田崎氏の論文は、本誌 pp. 18-24 に掲載)。これを受けて、東京大学講師の孫大輔氏が、自らが主宰する「みんくるカフェ」の活動を報告しながら、医療者側が患者との「まなざしの違い」を理解する機会を持つことの重要性を強調しました(孫氏の論文は、本誌 pp. 13-17 に掲載)。

シンポジウム2「職種を超えた連携とコミュニケーション」(コーディネータ:岩隈

美穂・小川哲次)では、専門職連携教育 IPE の現状を紐解きながら、専門職種連携 (IPW:Inter-Professional Work Collaborative Practice)におけるコミュニケーション研究のための糸口や手がかりを議論しました。慶應義塾大学教授の山内慶太氏は、福澤諭吉研究の内容から「他から学ぶ(協調学習)」ことの重要性を論じました。続いて、千葉大学教授の酒井郁子氏は、医療系教育機関における専門職連携教育(IPE)の先進的な取り組み事例の現状と、その取組によってもたらされた教員間の連携とコミュニケーションの変化について発表しました(酒井氏の論文は、本誌 pp. 26-30 に掲載)。最後に広島大学教授の高永茂氏は、模擬患者へのインタビュー調査の結果を提示しながら、IPWのコミュニケーション研究を行うにあたって、社会系の研究者が医療系多職種とどのように関わるのかといったことを論じました(高永氏の論文は、本誌 pp. 31-36 に掲載)。

シンポジウム3「行動変容につなげるヘルスキャンペーン」(コーディネータ:秋山美紀・高山智子)では、第一線でヘルスキャンペーンに取り組んできた3名の演者より、具体的な効果を上げてきた事例が紹介され、活発な議論が行われました。山形県庄内保健所長の松田徹氏は、対象者層の受診の障害を把握した上で、障害を除去する試みを広報と一体となっていくことの重要性を話しました(松田氏の論文は、本誌 pp. 38-41 に掲載)。続いて滋賀医科大学教授の

宮松直美氏は、テレビを使った脳卒中キャンペーンの実践を報告しました（宮松氏の論文は本誌 pp. 42-45 に掲載）。最後に（株）キャンサーズキャン社長の福吉潤氏は、乳がん検診受診率向上のために対象集団毎にメッセージデザインを変えて行うテラード受診勧奨の実践を報告（福吉氏の論文は pp. 46-50 に掲載）、その後、効果を上げるための具体的なノウハウ、ステークホルダーの調整、効果検証の方法、行動を維持・継続するための施策等を議論しました。

また今年度から一般公募によるポスターセッションが行われ、14の演題の発表が行われました。ポスター発表は、健康コミュニケーション系の演題7題、医療コミュニケーション系の演題7題のそれぞれの部門から、大会運営委員の投票により学会奨励賞が選ばれました。



ポスターセッションの様子

学会奨励賞ポスター発表は、酒井由紀子氏（慶應義塾大学信濃町メディアセンター）の「一般市民向け疾病説明テキストのリーダビリティ改善実験（第2・3実験）」、井上

祥氏（名古屋大学医学部医学科）他による「効果的な IPE を可能にする教育戦略の考察-コミュニケーション障壁の分析-」が表彰されました。

懇親会では、被災地支援の取り組みとして始まった「おらほのラジオ体操」の実践なども行われ、参加者同士が楽しい時間を過ごして懇親を深めました。



奨励賞の表彰を受ける酒井由紀子氏



奨励賞を受賞した井上祥氏（中央）

大会プログラム

2012年9月7日(金):第1日目

	2階 201/202号室	1階 ロビーフロア
13:30~15:00	セッション1: 医療とコミュニケーション学の対話 【演者】 孫 大輔 (東京大学) 田崎 勝也 (青山学院大学) 【コーディネータ】 宮原哲(西南学院大学) 杉本なおみ(慶應義塾大学)	ポスター 自由閲覧
15:00~15:15	休憩	
15:15~16:45	セッション2: 職種を超えた連携とコミュニケーション 【演者】 山内 慶太(慶應義塾大学) 酒井 郁子(千葉大学) 高永 茂 (広島大学) 【コーディネータ】 岩隈 美穂(京都大学) 小川 哲次(広島大学)	
17:00~18:30		ポスターセッション A 医療系(PM) 【進行】 藤崎和彦(岐阜大学) B 健康系(PH) 【進行】 秋山美紀(慶應義塾大学)
18:30~20:00	懇親会 (場所:1階 学生食堂)	※ポスターセッション奨励賞表彰

2012年9月8日(土):第2日目

	2階 201/202号室
9:30~10:15	特別講演1: 科学コミュニケーションにおけるプロフェッショナリズム 北村 聖 (東京大学) 【座長】 中山 健夫(京都大学)
10:15~11:00	特別講演2: 疫学からコミュニケーションへ 吉村 健清(福岡女子大学) 【座長】 中山 健夫(京都大学)
11:00~11:15	休憩
11:15~12:45	セッション3: 行動変容につなげるヘルスキャンペーン 【演者】 松田 徹 (山形県庄内保健所) 宮松 直美(滋賀医科大学) 福吉 潤 (株式会社キャンサーキャン) 【コーディネータ】 秋山 美紀(慶應義塾大学) 高山 智子(国立がん研究センター)